



仏 典 II

中村 元 編

世界古典文学全集

7

筑 摩 書 房

仏典Ⅱ

世界古典文学全集 第7巻

昭和40年7月25日発行

訳者代表 中 村 元

発行者 古 田 晁

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替 東京 4123 電話(291)局7651



降魔成道図（ガンダーラ地方出土，三世紀）

目次

維摩經	中村元訳	5
法華經	紀野一義訳	59
勝鬘經	高崎直道訳	171
華嚴經	玉城康四郎訳	195
阿弥陀經	早島鏡正訳	267
大無量寿經	早島鏡正訳	271
般若波羅蜜多心經	平川彰訳	303
八千頌よりなる般若波羅蜜經	平川彰訳	305
中論の頌	平川彰訳	359

大乘起信論

柏木弘雄 訳 377

理趣經

金岡秀友 訳 397

ダラニ集

金岡秀友 訳 413

解説

中村元 421

仏教用語の手引き

高崎直道 433

仏

典

Ⅱ

維摩經

第一章 仏の国土

このようにわたくしは聞いた。

あるとき仏はヴァイシャリー市の（アームラバーリー女の）マングー樹園にましまして、大勢の修行僧たち八千人とともにおられた。また三万二千人のぼさつ（菩薩）もともにおられた。

いづれも衆にみとめられ、大いなる智、それを得る本となる行ないを皆ことごとく成就しておられ、諸仏の不思議なちからにまもられていた。法の城を護るために正法を受けたもち、獅子吼して、その名は十方に聞えていた。ひとびとから請われなくても、みずから進んで友となつてかれらを安らかにしてやる。三宝をうけつぎさかんならしめ、絶えないようにし、悪魔や敵対者を伏し、もろもろの外道を制する。

皆ことごとくすでに清浄になつていて、煩惱の束縛から離れている。心は常にさわりのない解脱に安住して、念いつづけること、心のおちつき、きまつたことばとなえること、弁才はたえることがない。なさけぶかさ、つつしみ、たえしのび、つとめはげみ、おちつき、智慧、および方便力はどれも具わっていないものがない。

無所得にして何ものも生起しないという認識を達して、不退転のおしえを展開している。善く法相を解して、ひとびとの素質を知り、大衆にむかつてもおおそれることなく、大いなる功德と智慧とでその心を修し、

相好で身をかざり、みめかたちは第一であり、世間のあらゆる装飾をすてている。

はまれが高く遠くにおよんでいる点では須弥山にもこえている。こころねが堅固であることは、金剛石のようである。法の宝であまねく照し、甘露の雨をふらし、ことばや音声が実にみごとである。深く縁起のことにわりに入り、もろもろのあやまった見解を断じ、有と無との二つの極端説を断じて、もはやのこりが無い。法をのべておそれないことは獅子の吼えるがごとくであり、その講演するときには雷のなるがごとくである。認識の対象の範圍をこえている。もろもろの法の宝をとり集めるということでは貿易商人のごとくである。

諸法の深妙なる義に了達し、衆生の往来するところ及び心のありさまをよく知つていて、くらべるもののない仏の自在なる智慧、十力、無畏、仏にのみあり、他のものにはない十八の特徴に近づいている。一切の悪い生存領域への門をとざしているが、しかも五道に生れてその身体を現する。大なる医王となつてうまく衆病を療し、病に應じて薬を与え、服用させる。無量の功德をそなえていて、無量の仏国土をみなかざりきよめ、それを見聞するならば益を蒙らない者はいない。あらゆるしわざもむなしことがない。このように一切の功德がみなそなわっている。

かれらの名は次のごとくである。——等観ぼさつ、不等観ぼさつ、定自在王ぼさつ、法自在王ぼさつ、法相ぼさつ、光相ぼさつ、光嚴ぼさつ、大嚴ぼさつ、宝積ぼさつ、弁積ぼさつ、宝手ぼさつ、宝印手ぼさつ、常拳手ぼさつ、常下手ぼさつ、常憐ぼさつ、喜根ぼさつ、喜王ぼさつ、弁音ぼさつ、虚空蔵ぼさつ、執宝炬ぼさつ、宝勇ぼさつ、宝見ぼさつ、帝網ぼさつ、明網ぼさつ、無縁観ぼさつ、慧積ぼさつ、宝勝ぼさつ、天王ぼさつ、壞魔ぼさつ、電德ぼさつ、自在王ぼさつ、功德相嚴ぼさつ、獅子吼ぼさつ、雷音ぼさつ、山相擊音ぼさつ、香象ぼさつ、白香象ぼさつ、常精進ぼさつ、不休息ぼさつ、妙生ぼさつ、華嚴ぼさつ、觀世音ぼさつ、得大勢ぼさつ、梵網ぼさつ、宝杖ぼさつ、無勝ぼさつ、嚴土ぼさつ、金髻ぼさつ、珠髻ぼさつ、弥勒ぼさつ、文殊師利・法王子ぼさつ、——

これらの三万二千人であった。

また一万の梵天王すなわちシキン等がいた。四天下から仏のところへ来て法を聴いた。また一万二千の神々の帝王（帝釈天）がいて、四天下から来て、その会座にいた。またそのほかの大威力ある諸天人、鬼神、夜叉、天の衆人、阿修羅、金翅鳥、人非人、大いなる餽う者などがごとごとく会座に来た。もろもろの修行僧、修行尼、在俗信者、在俗信女ともに会座に来た。

そのとき仏は無量の幾百千の衆に恭しくうやまわれて、とりまかれておられたが、かれらのために説法された。そのさまは須弥山が大海のうちに顛われたようなものであった。おおくの宝でかざられた獅子座にやすらうておられ、やって来たすべての大衆をその威光が蔽うた。

そのときヴァイシャリー市にある長者の子がいたが、その名を宝積（ほうしやく）といった。五百人の長者の子とともに、みな七宝よりなる傘蓋をもつて、仏のましますところへやって来て、自分の頭を仏の足につけて礼拝し、おのおのその傘蓋をもつて仏に供養したてまつた。ときに仏の威力はもろもろの宝蓋を合せて一つの傘蓋としてしまい、遍く三千大千世界を覆うた。するとこの世界の広々とした相がごとごとくその中に現じた。またこの三千大千世界のもろもろの須弥山、雪山、ムチリンダ王、大ムチリンダ山、香山、宝山、金山、黒山、鉄鬚山、大鉄鬚山、大海、江河、川流、泉源、および日月、星辰、天宮、竜宮、諸尊の神宮もことごとくその宝蓋の中に現じた。

また十方の諸仏も諸仏の説法も、また宝蓋の中に現じた。そのとき一切の大衆は仏の神力をみて、未曾有のことであると感歎し、合掌して仏を礼し、尊顔を仰ぎみて、目をしばらくもはなさなかった。

そこで長者の子である宝積は、仏の前で次の詩句をとなえて、ほめたたえた。

仏さまの目が淨く廣くて長いことは、青蓮華のごとくであります。

心は淨らかで、すでもろもろのおちつきを完成しておられます。久しく淨業を積んで、無量であるとほめたたえられていらつしやいます。

衆を導くにも、やすらぎをもつてなしたもう。故にわたくしは礼したてまつるのです。

大聖者が神変をもつてあまねく十方の無量の国土を現ぜられるのを既に見ました。

そこにおられる諸仏は法を説きたもう。

そこで一切のものはことごとくそれを見聞しました。

法王の法力は群生を超えています。

常に法の財を一切のものに施し、能く諸法の相を分別し、第一義に立つて動かない。

すでに諸法について自在を得ておられる。

この故にわたくしはこの法王を礼したてまつるのです。

もろもろのものは有でもなく無でもなく、因縁を以ての故に生ずるのである、そうして、我もなく、造る者もなく、感受する者もないけれども、善惡の業はそのまま亡びることはない、と説かれます。

仏は始めはぼだい樹のもとにましまして、力もて惡魔を降伏させ、甘露のやすらぎを得て、さとりを完成されました。

もはやはからいもなく、感受のはたらきもないのであって、ことごとくもろもろの外道を摧き伏したもう。

法輪を三たび（示・勸・証について）大千世界に転じたもうたが、その輪は本来常に清淨でありました。

もろもろの天人も人間もさとりを得るのにこれをあかししました。そこで三宝が世間に現じたのであります。

この妙法をもつて群生を濟い、

ひとたび不退の位につくと常に寂然としておられます。

老いと病いと死とをいやす大医王であり、法の海の無辺なる徳をそなえているかたを敬礼しましょう。

毀譽によっても動かされないことは須弥山のごとくであり、善人に対しても悪人に対しても等しく慈しきをもつてむかわれます。心のはたらきの平等であることは、虚空のごとくであります。人間の宝であるかたの言われることを聞けば、だれが敬いつかえないでしようか。

いま世尊にこのささやかな傘蓋を奉ったところが、その中でわれに三千大千世界、もろもろの天人や竜神のいる宮、天の衆人など、および夜叉らを現ぜられたので、世間のあらゆるものをことごとく見ることができました。

十力ある仏はわれを哀れんで、このみちびきの神変を現じたもうたのです。

衆は希有なることをみて、皆仏を讃歎するのであります。

いま我は三界の尊きかたに稽首したてまつる。

大聖者である法王は衆の帰するところであります。

淨い心をもって仏を観るならば、よろこばない人はいません。

おのおのの人が世尊が前にましますのを見ます。これは仏にのみ特有の神力であります。

仏は一つの音声で法を演説されるが、衆生は類いにしてがつておのおの理解することを得る。そうして世尊は各自と同じ言語で話されたとかれらは思うのです。これは仏にのみ特有の神力であります。

仏は一つの音声で法を演説されるが、衆生はおのおの理解したところにしたがい、あまねく受け行なうことができ、その利をえるのです。これは仏にのみ特有の神力であります。

仏は一つの音声で法を演説されるが、聞く人はあるいは恐れ、あるいは歡喜し、あるいは厭離を生じ、あるいは疑いを断じます。これは仏にのみ特有の神力であります。

わたくしは十力あり精進に大いにつとめられるかたを敬礼します。すでに恐れのない境地を得たかたに敬礼します。

仏にのみ特有の徳に住しておられるかたに敬礼します。

一切の大導師に敬礼します。

もろもろの束縛を断じたかたに敬礼します。

すでに彼岸に達せられたかたに敬礼します。

もろもろの世間の人々をすくわれる方に敬礼します。

永に生死の道を離れた方に敬礼します。

衆生が来り去る相をことごとく知り、もろもろのことがらについてよく解脱を得、世間に執著せざることは蓮華の如くであり、常に空寂の行に入りもろもろのことがらの相に達し、さわりがなく、虚空のように、どこおることのないかたに敬礼します。

そのとき長者の子である宝積は、この詩句を説きおわってから仏に申しあげた、——「この五百人の長者の子らは、みなすでに無上のさとりに向う心をおこして、仏国土の清淨を体得することを聞こうと願っています。どうか願わくは、もろもろのぼさつの淨土の行をお説きくださいませ。」

仏がのたもうた、——「みごとだ、宝積よ、もろもろのぼさつのため、如来に淨土の行を問うてくれた。あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。われは汝のために説くであらう。」そこで宝積および五百人の長者の子は教えを受けて聴いた。

仏がのたもうた、「宝積よ、衆生の類いがすなわちぼさつの仏国土である。ゆえはいかに、というならば、ぼさつはみちびくべき衆生のいかに随つていづれかの仏国土を取り、おさえるべき衆生のいかに随つていづれかの仏国土を取る。もろもろの衆生がどの国によって仏の智慧に入るべきかに随つていづれかの仏国土を取り、もろもろの衆生がどの国によってぼさつの能力を起すべきかに随つていづれかの仏国土を取る。ゆえはいかに、というならば、ぼさつが淨らかな国土を取るといふことは、皆もろもろの衆生をめぐみ益するためだからである。譬えば、ある人が空地に家や部屋をつくり立てようとするときに、意のままに何らのさわりなくつくり立てることができるが、しかし虚空の中につくろう

としても、なしとげることができないようなものである。ぼさつもそのように、衆生を完成させるために、いずれかの仏国土を取ろうと願うのである。仏国土を取ろうと願うのは、虚空の中では目的を達成することができないからである。

宝積よ、よろしいか、直き心はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏となつたときに、諍^{しやう}わない衆生がやって来てその国に生れるであらう。

深く道を求める心は、すなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、徳を具えている衆生がやって来てその国に生れるであらう。さとりを求める心はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、大乘におもむいた衆生がやって来てその国に生れるであらう。なさけぶかさはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、自分のものをすべて捨てさつた衆生がやって来てその国に生れるであらう。

いましめはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、十の善い道を行う満願の衆生がやって来てその国に生れるであらう。

たえ忍びはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、三十二相でかざられたひとびとがやって来てその国に生れるであらう。つとめはげみはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、一切の徳を勤め修する衆生がやって来てその国に生れるであらう。おちつきはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、心を摂して乱れない衆生がやって来てその国に生れるであらう。

智慧はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成るときに、必ずさとりを得るはずの衆生がやって来てその国に生れるであらう。

慈しみ、悲れみ、喜び、平らかなところという四無量心はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成るときに、慈しみ、あわれみ、喜び、平らかなところをそなえている衆生がやって来てその国に生れるであらう。なさけぶかき、親愛のことば、ためになる行ない、協力という四つ、ことがらはすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、

解脱に摂せられる衆生がやって来て、その国に生れるであらう。方便はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、一切のことがらについて方便無礙なる衆生がやって来てその国に生れるであらう。

三十七のさとりの手段はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覺支、八聖道をおさめている衆生がやって来てその国に生れるであらう。

己が善根を他人に廻向する心はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、一切の功徳を具えた国土をあらわし得るであらう。仏法を聞くのにさわりのある八つの難所を除くのを説くのがすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、その国土には三惡道、八難所はあることない。

みずから戒行を守つて他人の欠点をそしらないということが、ぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときに、その国土にはへいましめを犯す^とという名称さえも存在しない。

十善はすなわちぼさつの浄土である。ぼさつが仏と成つたときには、人々は長が生きして、大いなる富あり、清らかな行ないをなし、真実になつたことばを語り、常にやさしいことばを語り、仲間がばらばらになることなく、争いを善く和らげ、必ずためになることを言い、嫉ます^といからず、正しい見解ある衆生がやって来てその国に生れる。

宝積よ、このようにぼさつはその直き心をおこしたのに随つて、その行ないをおこし、その行ないをおこしたのに随つて深いねがいをおこし、その深いねがいをおこしたのに随つて意をとのえ、意をとのえたのに随つて説かれたたとりに行ない、説かれたたとりに行ずるのに随つて、功徳を廻向^{くわうきやう}し、その廻向するのに随つて方便あり、その方便がおこるのに随つて衆生を完成し、衆生を完成するのに随つて、その仏国土が浄らになる。

その仏国土が浄らになるのに随つて、説法が浄らになる。その説法が浄らになるのに随つて、その智慧が浄らになる。その智慧が浄

らかになるのに随つてその心が浄らかなになる。その心が浄らかなになるのに随つて一切の功德が浄らかなになる。この故にもしもぼさつが浄土を得ようと欲したならば、その心を浄くすべきである。その心が浄くなるのに随つて、その仏国土が浄らかなになる。」

そのときにシャーリプトラ(舍利弗)は仏の威神力を承けて、このようにおもつた、——「もしもぼさつの心が浄いならば、仏国土も浄くなるというのであるならば、わが世尊がもとぼさつであつたとき、意が不浄であつていまこの仏国土がこのように不浄であるということが、どうしてあり得ようか？」

仏はシャーリプトラが心の中でおもっていることを知り、かれに告げて言つた、「汝はどう思うか？ 日月を盲者は見ないけれども、はたして日月が不浄であらうか？」

シャーリプトラは答えた、「そうではありません。日月が見えないというのは盲者の過であつて、日月のところがではありません。」

「シャーリプトラよ。衆生の罪の故に如来の国土のかざられ浄らかなありさまを見ないのである。如来のとがではない。わがこの国土は浄らかなであるが、汝はそれを見ないのだ。」

そのときに螺髻梵王がシャーリプトラに言つた、「この仏国土が不浄であるとおもつてはならない。何故かというところ、釈尊のこの仏国土は清浄であり、譬えば自在天の宮殿のようであるということをおたくしは知っているのです。」

シャーリプトラは言つた、「この国土には丘陵、あな、おとしあな、いばら、砂礫、土、石、山々など穢れに充滿しているのを、わたくしは見るのです。」

螺髻梵王が言つた、「あなたは心に高下があり、仏の智慧に依らないから、この国土を見て不浄だとおもうのである。ぼさつは一切衆生においてことごとく皆平等であり、深いところさしが清浄である。仏の智慧に依るならば、この仏国土が清浄であることを見得るであります。」

そこで仏が足の指で地をさすられたところが、即時に三千大千世界が数百千の珍宝で飾られるに至り、譬えば、宝莊嚴仏の、無量の徳のあるすぐれた宝でかざられた国土のようであつた。一切の大衆は、これは未曾有のすばらしいことだと感歎し、皆自らが宝の蓮華の上に坐しているのを見た。

仏はシャーリプトラに告げた、「汝は、この仏国土がかざられ浄らかなのであるをのみよ。」

シャーリプトラは答えた、「さようでございます。以前には見たこともなく聞いたこともないことでありますが、いま仏国土のかざられ浄らかなありさまがことごとく現われております。」

仏はシャーリプトラに告げた、「わが仏国土の常に浄きありさまは、かくのごとくである。ただこのような素質の劣つた人々をすくおうとするために、多くの惡にみちた不浄のこの国土を示現しているだけにすぎない。譬えばもろもろの天人が一つの宝器とともに食事をして、かれらそれぞれの福德に随つて、御飯の色がそれぞれの天人によつて異なつて見えるようなものである。このように、もしも人の心が浄ければ、すなわちこの国土がすばらしくかざられているのを見る。」

仏がこの国土がかざられ浄らかなであるありさまを現したときに、宝積のつれていた五百人の長者の子は皆、いかなるものも生じないと認めるさとりを得た。そうして八万四千人がみな無上のさとりをとめる心をおこした。そこで仏がその神通力をおさめたところが、世界はもとどおりになつた。教えを聞く弟子としての目的を達しようとする三万二千のもろもろの天人および人間は、へつくられた変化するものは皆ことごとく無常である」と知つて、塵を遠ざけ、垢を離れて、さとりの眼を開いた。八千人の修道僧は何ものをも執断することがなくなり、けがれが消え失せて、意が解脱した。

(1)「直き心」とは「ちとりをとめる心」(菩提心)のことである。チベツト訳は byan chub kyi sems と云ふ。

第二章 方便

そのときヴァイシャリー市の中に維摩詰（維摩）と略す」という名の長者がいた。すでにかつて無量の諸仏を供養して深く善根をうえ、何ものも生じないと認めるさとりを得て、弁才無礙であった。神通に遊戲して、もろもろの総持をたもち、畏れなき境地をえて、悪魔や敵対するものを降し、深い法門に入り、智慧の完成を善くなしとげ、方便に通達している。大願がすでに成就していて、衆生の心のねがいを明らかにさとり、またかれらの能力・素質の利鈍をくわしく知っている。久しく仏道において心がもっぱらおちついていて、決定的に大乘のうちにあり、あらゆる行動をなさうとして、よく思量している。仏のみなり・ふるまいに住して、心の大きなことは海のごとくである。諸仏はかれをほめたたえ、もろもろの弟子、帝釈天、梵天、四方をまもる神々に敬われている。

かれは人をすくおうと欲するが故に、たくみな方便をもちいる。ヴァイシャリー市に居住しているが、かれの資財は無量であつて、もろもろの貧民を摂し、戒めを奉じて清浄であり、もろもろのならず者を摂し、たえ忍ぶ行によつてもろもろのいかりを摂し、大いに努め励むことによつてもろもろの怠惰な人々を摂し、一心にしずかにおちついてもろもろの意の乱れた人々を摂し、確立して定まった智慧によつてもろもろの無智なる人々を摂する。

かれは白衣をつけた世俗の人であるけれども、修行者の清浄な戒律の行を奉じたもち、在家の人であるけれども、三界に執著していない。妻子あるすがたを示しているけれども、常に清らかな行を修している。眷属のあるすがたを現しているけれども、常に遠ざかり離れることをねがい、宝の飾りをつけているけれども、しかも相好をもつて身をかざり、

また飲食するけれども、しかも精神統一の悦びを味わっている。もし博奕や遊戲の場所に至つても、そのたびに人をすくい、もろもろの異なつた道を修する人々を受けいれても、正しい信仰をやぶらない。世俗の典籍を明かにするけれども、常に仏法をねがい、一切の人に敬われて、供養される人々のうちで最上のものとなる。

かれは正法をうけたもつてもろもろの長幼を摂し、一切の職業活動がうまくくだらかに行なわれ、俗利をうるけれども、それで喜ぶことはない。もろもろの四つ辻に遊んで、衆生のためになることをなし、法律政治のはたらきに入つて一切の人々を救ひ護る。講論の場所に入つては大乘をもつて導き、もろもろの学堂に入つてはこどもたちを誘ひみちびき、もろもろの姪舎に入つては姪欲に過のあることを示し、もろもろの酒店に入つては、人々に注意してやつてその志を立たせる。

もしも長者たちのあいだにいるときには、長者たちの中の尊い人とされて、かれらのためにすぐれた法を説き、もしも資産者たちのあいだにいるときには、資産者たちの中の尊い人とされて、かれらの貪り・執著を断じ、もしも王族たちのあいだにいるときには、王族たちの中での尊い人としてたえ忍ぶことを教え、もしもバラモンたちのあいだにいるときには、バラモンたちの中での尊い人としてかれらの慢心を除き、もしも大臣たちのあいだにいるときには、大臣たちの中での尊い人として正しい法律を教え、もしも王子たちのあいだにいるときには王子たちの中での尊い人として忠孝を示し、もしも後宮の女官たちのあいだにいるときには、後宮の女官たちの中で尊い人として女官たちをみちびきおさめ、もしも庶民たちのあいだにいるときには、庶民の中で尊い人として幸福の力を興させ、もしも梵天たちのあいだにいるときには、梵天たちの中での尊い人として勝れた智慧をおしえ、もしも帝釈天たちのあいだにいるときには、帝釈天たちの中での尊い人として無常を示現し、もしも方角をまもる神々のあいだにいるときには、方角をまもる神々の中での尊い人としてもろもろの衆生を護る。維摩長者は、このような無量の方便をもつて衆生を益しうるおわた。

かれが方便をもつて身に疾を現するや、その病氣のゆえに、國王、大臣、長者、資産者、バラモンなど、およびもろもろの王子、ならびにそのほかの官人や眷属など、幾千人とも数え切れぬほど多くの人が皆おもむいて、疾はいかがかを問うて見舞をのべた。

見舞に來た人々に、維摩は身の疾にことよせて、広く法を説いた。――「みなさん。この身は無常であり、力もないがし、堅固でもない。速やかに朽ちるものであって、たよりになることができない。苦しみであり、悩みであり、もろもろの病の集まる所である。

みなさん。このような身は、明智の者がたのみとしないものである。この身は聚沫のごとくであり、とらえることができない。この身は泡のごとくであり、久しく存立することができない。この身はかげろうのごとくであり、渴きのような妄執から生ずる。この身は芭蕉のごとくであり、中には堅いものは存在しない。この身は幻のごとくであり、顛倒した見解から起る。この身は夢のごとくであり、虚妄の見えたものにはかならぬ。この身は影のごとくであり、業の縁から現ずる。この身は響のごとくであり、もろもろの因縁に属している。この身は浮雲のごとくであり、須臾にして変滅する。この身は電のごとくであり、刹那、刹那にほろびて住まらない。

この身には主人がない。地のようなものである。この身には我がない。火のようなものである。この身には生命がない。風のようなものである。この身には人格主体がない。水のようなものである。この身は実体ならざるものである。ただ地水火風という四大をもつて（身体という）家をつくつただけである。この身は空であり、我と我がものを離れている。この身は精神的ならざるものであり、草木瓦礫のごとくである。この身は動かす活動主体がない。ただ風のような生氣の力に回転されているのである。この身は不淨であつて穢惡が充ち満ちている。この身は虚偽であり、かりに澡浴衣食をもつて気づかなくても、必ず磨滅に帰してしまふ。この身は災いである。

この身（を構成している四大の一つ一つ）に百一の病悩がある。この

身は丘墟の枯れ井戸のようなものである。老いのために逼められる。この身には定めがない。かならず死すべきものである。この身は毒蛇のごとく怨をなす賊のごとく、ひとのいない聚落のようなものである。五つの要素、十二のよりどころ、十八の領域がともにあつまつて合成したものである。

ひとびとよ。これは厭うべきものであるから、仏身をねがうべきである。そのゆえはいかに、というに、仏身とはすなわち法身である。それは無量の功德・智慧から生じ、いましめ、おちつき、智慧、解脱、解脱したと知る見解から生じ、慈しみ、悲れみ、喜び、たいらかな心から生じ、なさげぶかき、いましめ、たえしのび、柔和、つとめはげみ、おちつき、解脱、三昧、学識、智慧というもろもろの美德の完成から生じ、方便から生じ、六神通から生じ、三つの明知から生じ、三十七のさとりのよすがから生じ、止・観から生じ、十の力、四つの畏れなきこと、仏にのみある十八の特有の性質から生じ、一切の悪いことがらを断じて一切の善いことがらを集めることから生じ、真実から生じ、精勵から生じる。このような無量清淨の法から如来の身を生ずる。

ひとびとよ。仏身を得て一切衆生の病を断じようと欲するならば、無上のさとりに向う心をおこすべきである。」

このように維摩長者は、見舞つてくれた者どものために、かたのごとく法を説いて、幾千と数えられぬほど多くの人々をして皆無上のさとりをもとめる心をおこさせた。

(1) 長者（主として金融業者）や居士（資産者）が國王や大臣よりも先に挙げられていることに注意されたい。こゝいう列挙のしかたはインドでは例外的である。ここに「維摩經」の社会的基盤が認められる。

(2) 「忠孝を示し」というのは、シナ人に向くように原文を改めて訳したのである。チベット訳にはむしろ「國王の快樂や王權にそむく」という意味に解している。

第三章 弟子

そのとき維摩長者はみずからおもつた、——「われは病いで床にねている。世尊は大慈があられるのだから、どうか愍み^{あはれ}を垂れて頂けないだろうか？」

仏はかれの意^{こころ}を知しめしてシャーリプトラに告げられた、「汝は維摩のところにへ行って見舞を言え。」

シャーリプトラは仏に申しあげた、「わたくしはかれのところへ行って見舞を言うことができません。なぜかと言いますと、おもし起します、わたくしは昔かつて林の中で樹の下で安坐していました。

そのとき維摩詰がやって来て、わたくしに申しました、『必ずしも坐していることが安坐なのではない。そもそも安坐とは三界のうちに身と意とを現じないことである。一切の精神作用を滅しつくした禪定から起らないでしかももろのふるまいを現することこそ安坐なのである。道法を捨てずしてしかも凡夫の事を現する、これが安坐なのである。心が内に住せず、また外に在らず、これが安坐なのである。もろもの見解について動することなく、三十七のさとりの手段を修行するのが、安坐である。煩惱を断せずしてねはんに入る、これが安坐である。もしもこのようにして坐する者であるならば、すなわち仏の印可したもうところである』と。

そのときわたくしはかれがこの語を説くのを聞いて黙然として止み、答えることができませんでした。この故にわたくしはかれのところへ行って見舞うことができないのです。」

仏は大マウドガリヤーヤナに告げたもうた、「では汝が維摩のところへ行って見舞を言え。」

大マウドガリヤーヤナは仏に申し上げた、「わたくしはかれのところへ行って見舞を言うことができません。なぜかと言いますと、おもし起しますが、わたくしが昔ヴァイシャーリーの大都市に入り、街路でももろの資産者のために法を説いていました。

そのとき維摩がやって来て、わたくしに申しました、『白衣をつけた世俗の家主のために法を説くには、いまあなたが説いているようなことではないけません。そもそも説法とは、法のごとくに説くのでなければなりません。もろもの法には主となる衆生はありません。何となれば法は衆生の垢を離れているが故に。法には我がありません。何となれば我の垢を離れているが故に。法には生命の主体がありません。何となれば生死を離れているが故に。法には人格の主体がない。何となればそれは過去世とも未来世とも断絶しているが故に。法は常に寂然としている。もろもの相を滅しているが故に。法は相を離れている。何となれば認識されるものがないが故に。法には名字がない。何となれば言語を断じているが故に。法は説かれることがない。何となれば虚空のごとくであるから。法には無意義な議論はなされない。何となれば畢竟空であるから。法にはへわがものゝという関係はない。何となればへわがものゝという関係を離れているが故に。法には分別がない。何となればもろもの識別作用を離れているが故に。法は無比である。何となれば対比さるべきものがないが故に。法は因に属しない。何となれば縁のうちに在らざるが故に。法は法性に同じ。何となれば諸法に入るが故に。法は真如に随う。何となればそのほかに随うよすががないから。法は真実の究極に安住している。何となればそれはもろもの対立に動かされないから。法には動揺がない。何となれば六つの対象領域に依拠していないから。法には去来がない。何となれば常に住することがないが故に。法は空に順じ、無相に随い、無作（無願）に応じている。法は好醜を離れ、法は増すことも損ぜられることもなく、法には帰するところもない。法は眼、耳、鼻、舌、身、心を超えている。法には高下がない。法は常住であつて動

しない。法は一切の分別の行を離れている。法の特質はこのようなものである。どうして説くことができようか。

そもそも法を説く者には実は説くこともなく、示すこともない。その法を聴く者にも聞くこともなく、得ることもない。譬えば、幻術使いが幻の人のために法を説くようなものである。このような心がまえをして、法を説くべきである。衆生の能力・素質に利鈍があるのを了解して、知見についてさわりとどこおることなく、大悲心をもって大乘を讀じ、仏恩を報じようとして、三宝を斷じないように念じて、そうして後に法を説くべきである』と。維摩がこの法を説いたときに、八百人の家主は無上のさとりをもとめる心をおこしました。ところがわたくしにはこの弁がありません。だから、わたくしはかれのところに行つて見舞を言うことができないのです。」

仏は大カーシャバに告げたもうた、「では汝が維摩のところへ行つて見舞を言え。」

大カーシャバは仏に申し上げた、「わたくしはかれのところへ行つて見舞を言うことができます。なぜかといいますと、おmoi起しますが、わたくしが昔貧しい里で托鉢乞食を行っていました。

そのときに維摩がやつて来て、わたくしに申しました、『大カーシャバよ。あなたは慈悲の心があるのに、あまねくおよぼすことができていませんね。——豪富の家を捨てて貧者から乞うとは。カーシャバよ。平等の法に住して、(貧富を区別せずに)、順次に乞食を行ふべきである。食欲を克服してついに食事をしないようになるために、乞食を行すべきである、(五つの要素の)和合の相をやぶるために、握り飯を食すべきである。何ものも受けないという教えのゆえに、かれの食事を受けるべきである。人のいない空虚な聚落であると思つて聚落に入れ。見られる色は盲人が見る色と等しく、聞くところの声は響と等しく、嗅ぐところの香は風と等しく、食うところの食物の味はこれを分別せず、もろもろの触覚を受け入れることは智による証のごとく、もろもろのことがらを

知することは、あたかも幻の相を知ることがごとくである。それ自身の本性もなく、他のものとしての本性もなく、もとより燃えることもないから、今になって滅びるということもない。もしも人が八聖道の反対である八つの邪なことを捨てないで八解脱に入り、邪な相を以て正法に入り、一食を一切のものに施し、諸仏およびおおくの賢聖に供養し、そののちに食すべし。このようにして食する者には、煩惱が有るのでもなく、煩惱を離れるのでもなく、意のおちつきに入るのでもなく、意のおちつきから起つのもない。世間に住するのではなく、またね、んに住するのでもない。施しをなす者は大なる幸福はなく、小なる幸福もなく、益をなさず、損をなさない。これこそ、正しく仏道に入つて、教えを聞く人々に依らないことであるとなす。もしもこのように食したならば、空しく人の施しを食するというにはならないのである。』

そのとき、わたくしはこの語を説くのを聞いて未曾有だともい、ただちに一切のぼさつに對して深く尊敬の心を起しました。さらにこのようにおもいました。——『かれはこのように在家者としての名があり、弁才智慧もまたこのとおりである。誰がこれを聞いて無上のさとりをもとめる心をおこさないであろうか?』わたくしはそのときからこのかた、教えを聞くだけの修行僧、ひとりだけの修行者の行をひとに勧めませんでした。こういうわけですから、わたくしはかれのところに行つて見舞を言うことができないのです。』

仏はスプーティに告げたもうた、「汝は維摩のところへ行つて見舞を言え。」

スプーティは仏に申し上げた、「わたくしはかれのところへ行つて見舞を言うことができます。なぜかといいますと、おmoi起しますが、わたくしが昔かれの家に入つて食物を乞うたことがあります。

そのときに維摩がわたくしの鉢を取つて飯を盛り満たし、わたくしに申しました、『スプーティよ。もしも食物について等しい者にとつては、もろもろのことがらについてもまた等しい。もろもろのことがらについ